
3つの言葉「キュウリだけが知っている」@卯堂

卯堂 成隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3つの言葉「キュウリだけが知っている」@卯堂

【Zコード】

N3117W

【作者名】

卯堂 成隆

【あらすじ】

神々との戦いに敗れた冥府の民は、5000年にわたって暗い黄泉の世界に閉じ込められてきた。 そんな彼らを救うのは、なんと『キュウリ』の馬!? 9月の企画は、盆休み中に受信した電波と申しウー、恋愛要素をちょっと加えてお届けします。

「……本気ですか」

ピンクで統一された謁見の間に、げんなりとした自分の声が響く。

「むりん本気だ。地上への侵攻は、我ら冥府の王族の悲願！ たとえ異世界からもたらされた怪しい術であろうとも、我らの役に立つというならば何でも使ってみせようぞ！！」

答えたのは、まだ少女と呼んでも差し支えない女の声。

普段なら涼やかとさえ思える美声なのだが、今はややヒステリックな響きを帯びてキンキンと耳障りなのが残念だ。

チラリと上目遣いに声の主を見上げれば、一人の少女が玉座に座つてふんぞり返っている。

身に纏う豪奢なドレスの色は、引き裂かれた人肉を示すピンク。そのドレスを縁取るレースは、死の象徴である黒。

癖の無い黒髪はただ流れるままになびかせ、その髪を飾る銀のティアラさえかすむような美貌には、傲慢な微笑が罪深いほどよく似合っていた。

そう、彼女こそはこの僕の主にして、冥府の女王たるアマリエル・アマラポックリ13世。

2年前に崩御された先代女王から冥府を託された、偉大な魔女にして黄泉の女神である。

もつとも、その内情はと言えば……黙つていればそれなりに様になつてているのだが、女王らしい傲慢な口調が未だに板につかず、時折子供が背伸びをしているような無理が垣間見える。

「そこがいい！」と冥府の廷臣の間でもひそかにポイント高いのだが、同時に理不尽な我慢を言い出す癖があり、廷臣の誰もが一度

ならず彼女の発言によつて被害を受けていた。

はたから見ていればこれほど面白いことも無いのだが、その当事者となると話は違つ。

という訳で、僕は現在こいつの我侭をなんとか押し留めようと必死になつてゐるわけだ。

「いえ、陛下のおつしやりたい事はわかりますが、いくら何でもアレを使って地上に攻め入るのは、兵の士氣に関わるのではないかと……」

今回の我侭の原因は、異世界から召喚されたと言つ一人の青年の魂が、キュウリと呼ばれる植物から作り出された馬に乗つて地上に里帰りをした事に起因する。

それは、我々にとつて思わず自分の頬をつねりたくなるような出来事だつた。

なぜなら、5000年前の神々との戦争で敗れた我々冥府の住人は、他の神々によつて施された結界閉じ込められてしまい、それ以来この暗い世界から逃れようと飽くなき挑戦を続けてきたものの、一度たりとも成功したことはなかつたからだ。

学究の徒たるこの僕も、実際に話を聞いたときには自分の頬をつねつて夢ではないかと疑つたくらいなのだから、一般の廷臣たちの驚きようときたら、そのままうつかり魂が碎けて存在が消滅するではないかと思うぐらい激しかつた。

故に、本来なら緘口令を敷くべきこの出来事は驚愕を持って廷臣に広く知れ渡り、さらには女王の知るところとなつた次第である。

ちなみにもつとも反応が激しかつたのは軍部の連中だ。

いますぐこの乗り物を軍に導入し、地上へ攻め入ろうと鼻息荒くも玉座に押しかけたらしいのだが、当の乗り物を見た瞬間、彼らは物言わぬ埴輪の群れとなつたと言つ。

……理由は明白。

このキュウリの馬というものの、格好がひどく「モラス」と言つが、なんと言つか、その、かつこよくないのだ。

目も鼻も口も無く、細長い体は微妙にくびれて卑猥なシルエットを作り出し、その脚にいたつてはまつすぐな木の棒が突き出ているのみである。

いくらなんでも、これに乗つて勇ましく進撃……はどう考えても無理だ。

聞いた話だと、軍を預かる将軍はその場で女王に土下座をして侵略の要望を取り下げたとか。

それにしても謎の多い乗り物である。

いつたいどうやつて前に進むのかと首をかしげる代物なのだが、どういうわけか本来ならば、死んだばかりの魂と転生をする魂以外は決して乗り越えることの出来ない障壁をアッサリとすり抜け、光輝く世界へと飛び去つてしまつたらしい。

現場にいた死神の一人が、ショックのあまり未だに寝込んでいるのも仕方の無い話だ。

冥府の魔導研究機関に所属する自分の見解を述べるならば、おそらく想定外の術式に触れた事で神々の術式が一時的に崩れたのではないかといったところだが、全くもって自信は無い。

もつとも……その仮説が正しいとしても、直後に地上へ向かおうとした死神がアッサリ弾かれたところを見ると、術の崩壊は一時的なものであり、すぐに自己修復機能が働いて元に戻つてしまつたのだ。

ちなみに、数日後に同じくキュウリの馬に乗つて帰つてきた異世界人の魂に問い合わせたところ、これは彼の故郷の『ウラボンエ』と言う儀式に使用される術式で、馬に見立てたキュウリの人形に乗つて冥府と地上を移動するものらしい。

なんでも、彼がこの世界に召喚された時に偶然持つっていたキュウ

リの種を栽培し、毎年夏になつたらこの魔術人形を作つてくれるようになつた。うに遺言を残しておいたのだそうだ。

そこで口を出してきたのが、我らが女王。

つまり……やつてきたキュウリの馬を奪い取れば、毎年一人は地上に冥府の民を送り込むことが出来る。

いや、地上に送り込んだ冥府の尖兵が同じものを地上で大量に生産すれば、冥府の軍勢をこの地上に差し向けることすら可能なのだ

その結論が出た瞬間、女王は有無を言わせぬ口調で將軍の願いを退けた。

だが、考えても見て欲しい。

大量のキュウリの馬にまたがり攻め入る冥府の軍団を。

……すげー格好悪い。

知り合いの騎士たちからなんとかしてくれと懇願の視線を向かれた。

たぶん、この女王に意見できるのは僕をおいて他にはいないだろうし、むろん僕もそんな愉快な軍団は……すまん、ちょっとだけ見たいかも。

……とこつわけで、台詞は冒頭に戻る。

「いくらなんでも、これを冥府の騎獣とするのは問題ありかと」

「貴様、たかが廷臣の分際でこの私に意見する気か？」

むろん相手はまるで聞き耳を持たない。

顔を真つ赤にし、白骨で出来た錫杖を僕の鼻面に突きつけると、敵を見るような目で睨みつける。

「では、ただの廷臣ではなく、幼馴染からの忠告としてお聞きくださいませ」

そう、幸か不幸か、この我僕女王と僕は幼馴染の関係だ。
おかげで今までどれだけ苦労をしたことか。

「黙れ、クロム。何が幼馴染だ、この悪ガキの成れの果て！ 悪知恵と上背ばかり育ちあつてからに、この『冥界モヤシ』が！」

その言葉に、僕は思わず自分の肩を抱きしめる。

研究職についている僕は、多忙ゆえに普段から体を鍛える余裕も無く、そのわりに身長だけはぐんぐん伸びてしまつたわけ……鏡を見るたびに映る頼りない姿に、我ながら日々溜息をつかざるを得ない。

そんな僕に女王がつけた仇名が『冥界モヤシ』だ。

なるほど、うまくつけたものだとは思うが、それゆえに腹が立つ。ええい、モヤシを馬鹿にするな！！ 栄養豊富で日陰でも芽吹く力強い作物なんだぞ！？

「おのれ言つてはならん事を！？ いや、むしろ育つただけマシだ！ 少なくともお前の育たない胸よりはな！！」

売り言葉に買い言葉。 禁句には禁句で返すのが礼儀といつものだろう。

容姿に関しては完璧に近いアマリエルだが、唯一気にしているのが『胸』のサイズだ。

個人的には品の無い巨乳よりはずつといふと思……あー、いや、忘れてくれ。

とにかく、アマリエルを攻撃するならまず胸なのだ。

案の定、アマリエルは顔を真つ赤にして手にした杖を振り回しながら激昂する。

……落ち着け女王。 はしたないぞ。

「わいわいわい！ 殺す！ 殺してお前の畑に埋めて、来年はお前の血肉を吸つた葡萄でワインを作つてくれる！！」

「やれるものならやつてみろ！ 僕の育てた葡萄は気性が荒いぞ！ お前なんぞ、近づいただけで締め殺されること受けあいだ！！」

光の乏しい冥府に育つ植物は、その大半が高い戦闘力を持つ食人

植物だ。

ちなみにその凶暴な作物を調教し、冥府の名^レ家庭に食料を提供するが、藝長たるこの僕の仕事である。

「ひとつと冥府から出て行け、クロムウェル！」の冥界モヤシ！

「ああ、言われなくともそうするさ！この我假女！！お前の思
いつきに振り回されるのはうざりだ！！…………あれ？」

言つてしまつてから氣づくが、これつて向ひひとつて都合よ
さやしないか？

「という訳で、クロム……もといクロムウェル園芸長官には、地上にて我らの地上進出への足がかりとなる植物”キュウリ”の育成をしていただく事になった」

「 」 ！ 」

しまつたああああつ！！

……と心の奥で叫んだところで仕方があるまい。

地の法相がり語りて、作が反語し、三にキーハリが三に意見を封じるのは見えていた。

「うなつたからには覚悟を決めて地上に行くしかないか。ふう。
別に地上に行くのが嫌いなわけでもないし、むしろ光と縁溢れる
世界には興味がある。

だが、僕には冥府にどうしてもどまりたい理由があった。

謁見の間を後にした僕は、自らの研究室に戻るなり愛する存在を

抱きしめる。

ああ、愛しいカレン、可憐なリリアナ、我が心の安らぎジヨセフ
イース！ 僕の大事な『鉢植え』たちよ！ なぜ君たちを残して僕
は行かなければならないのだ！？

え？ 何か不穏な単語が混じつているつて？

男なら、誰しも心の底から愛する植物があるだろう。
なに？ 理解できない？ それは残念だ。

蔓や葉っぱの抱擁を受けながら、僕は愛する鉢植えたちの管理办法について綿密なマニュアルを作成し始めた。

後に残る部下に、鉢植えたちの世話を任せたためだ。

こら、ジヨセフィース。 仕事の邪魔をしちゃダメだろ？ イモ
リの黒焼きをあげるから、向こうでみんなで仲良く食べていなさい。
シユルシユルと音を立てて、女性の腕ほどの太さの葡萄の蔓がオ
ヤツの入った袋を絡めとり、背後の植物園へと消えてゆく。
次の瞬間、ギュオオオオオオオオと複数の雄たけびを上げて何
かが暴れる音が響いた。

きつとカレンたちとオヤツを取り合っているのだろう。 …… あ

あ、なんて可愛い奴らだ。 あんまり喧嘩するなよ？ 心配だなあ
……

まあ、僕がいない間に葉っぱ一枚でも揃ねたならば、部下全員と
その血縁者をそろって肥料にするのがわかっているから、やつらも
一切野手抜きはしないだろうけど。

慈悲？ 情け？ 植物にならともかく、人によこすようなものが
この僕にあるわけ無いだろう？
常識で考えたまえ！

さてと。

鉢植えの世話に必要なデータをメモリークリスタルに記録し、そ
れをライターゴーレムにセッティングしだ僕は、厳重な保管庫から

小さな袋を取り出した。

中に入っているのは、米粒より大きいぐらいの植物の種。

地上より異世界人の魂を載せて冥府に帰還し、ふたたび地上に戻りうとしたキュウリの馬を惨殺する事で手に入れた貴重な代物である。

今から僕は、この種に魔法をかけて実をむすばなくてはならないのだが、元々が地上の植物であるからして、冥府にある限り実を結ぶことは出来ても種を宿すことはできない。

そんなことを考えながら、素焼きの鉢の底に、網と小石を詰め……そしてちょっととしたアクセントとして馬の頭蓋骨をその上に乗せた。

さらに水はけや栄養分を計算し、念入りにブレンンドした土を上からかぶせ、小さな種を一つ埋め込むと、儀式の準備はほぼ完了である。

「我らが冥府に栄えあれ。暗き世界の神々よ、御身の上に讃れあれ、その双手には命と死の果実が宿る。偉大なる生命の王の横顔、秘された領域の狭間より見守りし月ならざる太陽の対とその象徴、その梢の上に座します死の神々の御名において、また、地上に新たなる命を産み落とす死の神々の母性において……」

長い詠唱とともに鉢植えの表面に円と十字を記し、生命と豊穰の印である牛乳を線に沿つて流し込むと、鉢植えを中心不可視の力が徐々に溜まり始めた。

「……目覚めよ、そして見よ、麦穂の黄金、草木の緑、大地の色をその身に纏い、剣持てる御使いは来たれり。そして世界を作りし大樹の右手の指が、慈悲と栄光をもつて汝に触れるであろう。生まれ無き者、形なき者は、今こそ汝の内に星となりて宿れり。我が意思において命ず……かくあれし！」

詠唱の終わりと共に土の上に軽く接吻をする。

その瞬間、流れ落ちる滝のごとく莫大な魔力が鉢植えに押し寄せ、

その全てが吸収されていった。

あとは、ただ待つのみである。

「さて、うまくいったかな?」

全ての作業をなし終え、額に浮かんだ汗をぬぐった瞬間……

パンッ!

何かがはじけるような音と共に鉢植えが爆発し、濛々たる土煙を突き破るよろづにして緑の蔓が溢れ、僕の部屋中を乱舞する。

「お、おおおおっ!？」

その鉄槌のごとき緑の鞭が僕の体を打ち据えようとしたとき、バキン、ガキキン!

突如目の前を龍の鱗のようなものが覆いつくし、緑の猛威の前に立ちはだかつた。

「助かつたよ、リリアナ」

僕の命を守つたのは、僕の可愛い剛槍百合の表皮だった。

まるでタケノコのような姿をしたこの植物は、本来ならば地雷のように地中に潜み、その鉄よりも硬い槍状の表皮で一突きするで獲物をしとめ、その血肉を養分として真っ赤な花を咲かせる。

だが、調教をすれば即座に主の身を守るシェルターにもなれる優秀な軍用植物だ。

「カレン、ジョセフィーヌ。もういいよ。離してあげなさい」
リリアナの表皮から外に出ると、見慣れない蔓植物が葡萄と薔薇の蔓に縛られてもがいているところだった。

「大丈夫、怖くないから」

懐から針を取り出すと、僕は迷わずそれを左手の指先に突き刺し、次に右手の指にも突きたてる。

そして左右の指から流れる血を混ぜ合わせ、生まれたばかりの蔓植物に押し当てた。

根はこの部分だな。

「我は”尊厳”をもて汝を戒め、”慈悲”をもつて守り導かん。受け入れよ。我は汝が親なり」

植物の欠点として、与えられた液体は全て吸い取ってしまう性質がある。

その性質を利用して、魔力を込めた血を強制的に飲ませて自らを主と認識させるのが僕たち冥府の庭師の常套手段だ。

ここにいる植物たち全てが、そうやって生まれた僕の可愛い子供たちである。

「さて、君にも名前をつけてあげなきやね」

む、ジョセフィーヌの”酩酊”の魔力に当てられたかな？

すっかり大人しくなつたというか、ぐつたりとした蔓植物を優しく撫でると、僕はこの生まれたばかりの生き物に名前を与える事にした。

「うーん。なんと言うか、君は男の子つて感じだよな。冥府に生まれた最初のキュウリとして勇ましい英雄の名前をつけてあげよう」

アーサーは周りの奴らに出番や人気をもつていかれそうだし、アキレウスは最後に弱点を突かれて殺されそうだし……英雄つてけつこう口クな死に方しないんだよな。

「そうだ、ハーキュリーがいい！」

それは神から12の難題を与えられた英雄の名前だつた。

彼の最後は妻に裏切られて毒殺だつた氣もするが、そのあと神々

の一人として迎え入れられたって結末だつたはずだし、これなら救
いがあつていい感じだよね！

だが、僕が名前をつけた瞬間、不意にハーキュリーの体がピクンと跳ね上がる。

一
ど
う
し
た
ハ
キ
エ
リ
ー
?

まさか、呪力を注ぎすぎて器が耐え切れなくなつたか！？

焦る僕の言葉に反応するかのように何度も痙攣を繰り返す

—キュリーは頭上に一輪の巨大な黄色い星型の花を咲かせた。
しかも次の瞬間、もう一輪の微妙に形の違う花が後ろから顔を出

「雄花と雌花か！」

形の異なる二つの花は、まるで人がキスをするようにムグムグと

お互いに色を寄せ合って、穀粉の作業を行っている。

そう思つた瞬間、最初に咲いた花がシナつとしおれて地面に落ちた。

……果てたが。

さて、どうしてはいられない。

受粉が終わったということは、実をつける段階に入ったということだ。

何か栄養のあるものを持ってこなくては！

僕はハーキュリーのエサとなる生贊を求め、研究室を飛び出した。

「……いつまで待てば良い?」

扉が開くなり飛び出したのは、我らが女王アマリエルの苛々とし

た声だつた。

「とりあえず、ハーキュリーが完全に成熟するまでかな？」
出来るだけ自然に答えたつもりだが、僕の頬を一筋の汗が流れ落ちる。

彼女の言わんとすることはただ一つ。
いつになつたら地上に行くのかという話だ。
彼女の命令を受けてから、かれこれ1月が経過している。
そろそろこけるとは思うんだけどなあ……

視線の先には、屋外で戯れる一本のキュウリの果実。
ただし、そのサイズは馬を超え、ドラゴンといつても過言ではないレベルだ。

先ほど測った全長は、ざつと7ポツ ハーフ。

1ポツ ハーフは初代の冥府の女王の身長を基準に制定された単位だといわれているから、成人女性7人分ぐらいの大きさだ。
ちなみにまだ成長中である。

「いくらなんでも育ちすぎだとは思わぬか？　かなり変異も進んでおるしな。　お主、こいつを発芽させるのにどれだけの魔力を使つた？」

もはや見上げるほどに成長したハーキュリーを見据え、アマリエルはしみじみと呟く。

……言われて見ると、確かに変異が激しいな。

果実の先端の部分には真っ白な馬の頭蓋骨が浮き上がり、本物の口のように飲み食いが可能であるため、今は肥料も水もそつちの口から行つている。

長大な体は蛇のようにしなやかに動き回り、いつのまにか這う事で自力で移動すら可能になつていた。

最初の蔓の部分は果実の部分に全て吸収され、枯れ枝のよつなものがわずかに尻尾の先に付いているのみ。
もはや発芽当初の姿はどこにも残っていない。

あまつさえ、首にある部分には長い棘が角のよつに立ち並び、
パツと見ただけでは新種のドラゴンと言つた方が納得できる。
はて、どこで間違つたのだろう？

ま、いいか。パパとしては息子が逞しく育つのは嬉しいし。
この“デザインなら、軍部の連中も喜んで騎獣にするだろ？”

「んー発芽の時に呼び出した靈なら少し覚えてるぞ。セイゼイ、
”理解”の領域の精靈を4柱と、深遠の神靈と、あとは生命の王と
現世の守護御使いを呼び出して祝福を与えたぐらいかな？」
他にもいくつか靈を呼んだ気がするけど、いまとなつてはよく覚
えていない。

なぜかリストを上げるたびにアマリエルが目を見開いたり口をま
ん丸にあけたりと忙しいのだが、何か変なことでもしただろうか？
お、カレンが獲物を見つけたかな？

合図代わりの甘い薔薇の香りを嗅ぎ取るなり、ハーキュリーとジ
ヨセフィーフが飛び出して行く。
スペアアアアアン！

その様子を満足げに見ていた僕の頭に、突然ハリセンが襲い掛か
つた。

「あ、アホかお主！ そのどれか一つ呼び出すだけでも小さな国が
滅ぼせるぞ！ というか、なぜ一人でそれだけ上位の靈を呼び出せ
る？ 一つ呼び出すだけでも宮廷術士7人がかりの儀式だぞ！ ア
ホなの？ 馬鹿なの！？」

ああ、たしかに言われてみればそうだったかも。
でも、そんなちつさいことは気にしてはいけない。

「そうだな、じいて言つならば愛の成せる業と言つたところか」「遠くでハーキュリーとジエセフィースが仲良くジャイアントバットの群れを仕留めて、他の姉妹たちと仲良く分け合つている姿を見て幸せの溜息をつく。

仲良きことは美しきかな。

「死ね！ 」この植物偏愛主義者！ その半分でもいいから私に愛を向ける！！」

真っ赤な顔をしたアマリエルが、なぜか力任せに魔族の骨から作った杖を振り回す。

おーい、その杖、ダメージと同時に何か呪いが発動するんじゃなかつたつけ？ なんかヤバ、そうなオーラ放つてはいるんですけど！！さすがに全ては避けきれず、アマリエルの杖が僕の腕や脚を何度も掠める。

うわー えげつないな。

傷口に血をやれば、案の定、杖の当たった部分から芋虫のようなものが発生し、僕の皮膚を食い破つて体の中にもぐりこもうとしていた。

「いひ、殺す気か！ ……あと、サラリと変な」と言わなかつたか？ 愛をよこせとか

危ないからさつさと解呪しないと。

ま、この程度の呪いの強度がこの程度なら、まだ本氣で怒つているわけじゃないだろうけど。

「しゅ、主君としての敬愛を持ってといつ話だ！ お前は私への敬意と言つものが足りんっ！！」「あ、そりやすいませんねえ。

なにぶんガキの頃からこんな感じで顔つき合わせているからいまさら敬えとか言つてもなあ。

でもまあ、確かに二つの言葉も一理あるわな。

「ああ、忠誠心を持ってつてことね。てつきに愛の告白でもされたかと思つて焦つちゃつたよ」「

僕がふとそんな台詞を吐いた瞬間、アマリエルから全ての表情が
消えた。

や、ヤバイ！ ここ、マジでキレやがった！ なぜだ！？

妖氣溢れる冥府の庭園に、狂った女王の笑い声が響き渡る。

そして強制的に始まつた幼馴染との愉快な鬼ごっこには、牙の生えた陰気な花々を散らし、毒を帯びた刃物の固まりような茂みを搔き分け、真紅の月が三度天頂を通り過ぎ、やがて仕事の催促をしにきた宰相が女王を自身でもつて止めるまで続くのだった。

その後、僕が正座1週間という拷問のような刑罰を受けたのは、まつたくもつて納得がゆかない。

で出来ているのだと想ひ。

長年、幾多の魔術師を退けていた結界が蚊遣りの網のように切り裂かれてゆく。

碎けた見えざる力は突風のように吹き荒れ、僕の肩を頬をかすめて遙か後ろに消えていった。

墨を押し流したような闇の中、僕の指さす白い光がみるみるその姿を拡大する。

結局僕が地上についたのは、ハーキュリーが誕生してから一ヶ月

後のことだった。

……あの理不尽なお仕置きで行動不能にさえならなければ、もつと早くたどり着けたものを。

まあ、過ぎた事は仕方が無い。

やがて真っ白な光が全身を包み、冥府の闇の向こうにたどり着く。そして……

気が付くと僕は見渡す限りの砂漠に立っていた。

「……地上？」

初めて見る地上の風景は、赤茶けた岩だらけで何も無い場所だった。

絵画として残っていた縁成す森や草原はどこにもなく、ただ荒々しい岩と砂の支配する世界。

まあ、予想しなかったわけではない。

ほんの100年ほど前のことではあるが、神への感謝を忘れた人間たちは、自らの技術におぼれ、多くの靈を従えようとして精靈たちの怒りを買ったのだという。

今では神々にも見捨てられ、ほんのわずかに残された森のほとりで細々と暮らしているのだと、冥府にやつてきた人の靈から聞いていた。

そう、はじめから判つていたはずなのだ。

地上がかつての楽園ではないということぐらい。

だが、口をついて出たのは、思いもかけない台詞だった。

「ガツカリだよ、ハーキュリー。まさか地上がこんな場所だったなんてね」

なぜだろう？はじめから期待なんてこれっぽっちもしていなか

つたはずなのに、どうしてこんな口調が出てくるのだ？

答えは実に簡単だ。

顔に手を当てて喉に引っかかるような声でクツクツと笑い声が洩れる。

心のどこかで望んでいたのだ。

我々が心の底から憧れた世界が、縁溢れる美しい世界である事を。冥府の植物たちと戯れていればそれで幸せだと思っていたこの僕でさえ。

たった100年でこの有様か。

精靈が見捨てたとはいえ、実にむごい光景だ。

そういえば、冥界で現在の地上の荒廃についてかたる人間たちは、口を揃えてこう言つていた。

『まさかこんな事になるとは思わなかつたんだ。きっとそのうち何とかできると思つていたのに』

なんと愚かな生き物だろうか？ 現実と向き合つだけの氣概も無く、ただ都合のよい幻想のみを信じた頭の悪い生き物。

滅びて当然だと思つ。

いつたいどれだけの時間を呆然とすゝんでいたのだろうか。

気が付くと周囲は真っ暗になつていて。

ただぼんやりと空を見上げて星を眺めていると、不意に藍色の視界に影が揺れる。

「やあ、ハーキュリー。君の親の実家はひどいところだな。毎年キュウリの馬を送つてくるヤツがいるのだから、まだどこかに縁が残つてゐるのかもしれないが、これではいつか途絶えてしまうだらうつね」

それはそう遠い未来では無い。

精靈に見捨てられたこの世界には、もはや命はおろか靈すらもほ

とんでもないのだから。

全てが滅び去るのも時間の問題だらう。

まったくしゃれにならない話だ。

またか地上が冥府よりも死に近い場所だったとはな。

僕たちは、それ以上会話することも無くただじっと星を眺めていた。

もうたぐさんだ。

アマリエルに知らせを送るつ。

地上は冥府よりもひどいところだと。

だから、こんな醜い場所はとつとと忘れて、冥府をよつよつする事に一生を捧げるべきだと。

光あふれる空虚な地上よりも、陰氣で騒がしい冥府の方が遙かにすばらしい。

僕がそう思い立つて冥府へつながる門を開こうとしたとき、夜空はすでに青みを増し始めていた。

東の空は薔薇色に変わり始め、やがてそれは白みを増しながら天と地の色を変えてゆく。

夜明けだ。

それは、地上にきてから初めて美しいと思う光景だつた。やがて地平の向こうから金の糸を束ねたような光があふれ出すると、それに合わせるかのように、風の唸り声のような低い音が鳴り響く。

「これは……歌なのか？」

音の主は、隣に佇むハーキュリーからだつた。

彼もまた、この世界の有様を嘆いて鎮魂歌でも歌つてゐるのだろうか？

いや、違う。

「無駄だよ、ハーキュリー。君の祈りを聞く相手はこの世界にも

う存在しない」

あまりの重低音に勘違いをしてしまったが、彼が歌っていたのは、水の精靈を讃える歌だった。

僕が庭の植物達のために行つた雨乞いの儀式を横で聞いて覚えていたのだろう。

身を切るような切実な祈りであるにも関わらず、それに答えるべき精靈たちは、すでにはるか天上の彼方へと消え去っている。

よしんば聞こえたとしても、言葉を口に出来ない彼の祈りはただのメロディーに過ぎず、言靈を使えない彼は祈りの意味を相手に伝えることが出来ない。

「無駄だと言つていいだろ？　あまり無茶な事をすると、枯れてしまうよ」

その巨体ゆえにすぐには枯れたりしないだろ？が、このまま続ければ彼の寿命を縮めてしまうだろ。

歌を歌うという行為は本来彼に備わっていない能力なのだから、どれだけ無茶な行為であるか、この僕にも想像が付かない。

「帰ろう、ハーキュリー。ここは君が生きるには相応しくない」懸命に祈りを捧げる相方を促し、そのシッポのようになに残った蔓を軽く引っ張るが、彼は頑としてその場を動かない。

「君の思うところも解らないわけじゃないけど、無駄に意地を張るよりは現実を見つめるべきだ。ここで無駄死にする気か？」

いつたいどれだけ言葉を重ねただろうか？
再三にわたる説得にも関わらず、ハーキュリーは、精靈を呼ぶための歌を歌い続けた。

そして、そのまま一週間が過ぎただろうか？

パキッ

その朝僕は、不吉な音で目を覚ました。

そして音の主を確認するなり……

「うわあああっ！」

恥も外聞も無くわめき散らし、服の乱れを気にするまもなく飛び起きる。

目の前にあつたのは、真っ二つに割れたハーキュリーの姿だった。その大きくひび割れた体からは、大量の種が零れだしている。そしてそのこぼれた種を、どこからか這い出してきたらしい小さなトカゲがついばんでいた。

「い、このつ！ 寄るな！ その種を吐き出せ……！」

僕が拳を振り上げると、トカゲはちよろちよろとその場から逃げ出していった。

いつたいこの不毛な砂漠のどこに隠れていたといつのだろうか？ 野生に生きる命とは存外にしぶといものらしい。

何にせよ、一度とここに来ないよう呪いをかけてくれる。術を発動するために振り上げた手に、ふと何かが絡みついた。

「……ハーキュリー？」

僕の手を止めたのは、ハーキュリーの体から伸びた、枯れかけの蔓だった。

そして彼は大地に種を撒き終えると、その硬い蔓を擦り合わせ、爆ぜた体を共鳴版にして、バイオリンのような音を奏ではじめめる。それはとても美しい、滅び行く者の調べ。

ああ、そうか。

彼はこの大地と一つになり、新たな森の苗床になろうとしているのだ。

だが、肝心の精霊たちに彼の祈りは届かない。

僕が強制的に精霊を呼ぶことは可能だが、その後、彼の作った森に愚かな人たちがやってきてその恩恵を受けることを考えると、どうしても嫌悪感が先に立つ。

……どうする？

心から願わない祈りに、精靈が答えることは無い。

だが、このままではハーキュリーは無駄に命を散らす事になる。

その後、来る日も来る日も、彼は精靈を呼ぶための歌を歌い続けた。

無駄だと何度も忠告したが、この頑固な植物は決して歌うことを見やめなかつた。

そしてある日の朝……音楽が止まつた。

寿命だ。

その体は完全に変色し、深い縁であつた体は黄色い斑模様にすっかり変わつていた。

「だから、無駄だといつただろう」

僕の呴きは空しく虚空に消え、その亡骸を砂漠の風が乱暴に撫でてガサガサと耳障りな音を立てる。

見上げる空には、雲どころか靄一つ無い。

僕は、その空の青さがどうじょうもなく増へ思えて、思わずキツく睨みつけた。

そう。

結局のところ、彼の祈りは精靈には届かなかつた。

だが、どこにも届かなかつたわけではない。

「……大空の瀑布の鍵を握り、大地の洞に湖をしつらえし者。溢れる河川と激しき驟雨は汝を主と仰ぎ奉る」

なぜ今になつてこんなことをする気になつたのか、自分でも不思議に思うのだが、おそらく素直な気持ちで、僕は水の精靈王へ捧ぐ祈りの言葉を唱え始めていた。

もつと早くに決断を下すことの出来なかつた自分がどうしようもなく情けない。

だが、後悔というものはけつして先には立たぬものなのだ。

地面にこぼれた水が盆に戻ることが無によつて、時は決してまき戻りはしない。

なら、今は何も考えずに最善をつくすべきだひつ。

「その足の下に河と泉、あらゆる水の源を生み出す汝。 大地の血にたとうべき大河を統べ、厚き雲に草木の生氣となるべく下知する汝、我らは汝を崇め汝に祈る」

この世界が疎ましいのは今も変わらない。

たぶん、僕は彼の行つたことが全て無駄になるのがどうじても耐えられなかつたのだろう。

それはただの自己満足に過ぎないのだろうが、それがどうした。結局、この世の全て行為とは自己満足に過ぎないのだから、僕はこの行動を誰に対しても恥じるつもりは無い。

「汝によつて潤いを『えられたる我ら、海のどよめきを汝の声と聞き、我らは汝の前に恐れ戦かん。 また、田畠を潤すせせらぎを汝の声と聞き、我らは汝の愛を乞わん』

言葉に込められた力により、天の彼方から引きずり出された精霊の雲が、青い空を瞬く間に黒く塗りつぶす。

なあ、精霊たちよ。

そんなに簡単に引っ張り出されてくれるなよ。

お前たちを呼ぶために、彼がどれだけ努力を払つたと思つてゐる？ こんなに簡単に出てくるぐらになら、なぜあの真摯な祈りが聞こえなかつた！？

まったくもつて、この世界は不条理で不公平だ。

でも、一番呪わしいのは、全てが手遅れになつてからでしか行動

の出来なかつた自分の愚かさに違ひない。

「おお、存在の全ての大河がその中に消え失せ、そして常にその中から蘇る。おお、無数の完璧を内に秘めた大洋、深みの内に陰を映す高み、高みに向かつて息を吐く深淵よ、智と愛によつて我らを眞の生命へ導き給え。我らの祈りを聞き届け、諸処の過失を赦し、不滅の命へと導き給え」

祈りの言葉が終わりを迎へ、降りしきる雨の中で、パチン、パチンとハー・キュリーの残した種が一つ一つ芽吹いてゆく。

泡の弾けるような音を意識の片隅で聞きながら、僕はその場に蹲つて自分の身を焦がす身勝手な感傷をもてあまし、自分の思うままにふるまつたにも関わらず嫌悪感に打ち震えていた。

この感情を、人は何と呼ぶのだろうか？

口にするには心が痛すぎて、文字にするには曖昧すぎて、僕はそれをうまく言い表すことが出来ない。

もしこれを何かに例えるのならば、きっと『取り返しの付かない欠落』とでも呼ぶべきなのだろう。

……なんだ、結局のところ、僕も精霊に見放された人間たちと変わらないぐらい愚かではないか。

僕の呼んだ精霊たちは数日おきに雨を降らせ、やがて何も無かつた砂漠をハー・キュリーの残した子等が覆い尽くした。

緑に覆われた大地に、どこからとも無く鳥や獸が訪れるようになり、そして彼らが運んできた種がこの蔓で覆われた地に新たな植物を宿し、気が付くとそこは豊かな森へと成長をし始めていた。

そしていくつもの季節が過ぎた頃、『彼ら』はやつてきた。

「……あなたは神であらせられますでしょうか？」

その、みずぼらしい衣服を纏つた奴らの代表は、開口一番僕にそう問いかけた。

「さあ、どうだらうな？」少なくとも、お前たちが思い描く神とは違つ存在だ」

どうしてだろ？

彼らとあつたときに感じた想いは、嫌悪ではなく奇妙な満足感だつた。

もしかしたら、僕はハーキュリーの祈りが引きかと分かち合い、誇りたかつたのかもしれない。

彼の死が決して無意味でなかつた証として。

「貴方がどのような方かは存じ上げませぬが、もしも慈悲がある方ならば、寄る辺無き我らをこの無理に迎え入れてはもらえないでしょつか？」

「別にここに住むことは構わないが、一つだけ条件がある」

示した。

久しぶりに顔を見た幼馴染は、ひどく不機嫌……いや、これはそ
んな高尚な感情ではないな。

彼女はひどくむくれ、拗ねていた。

「なあ、クロム。お前が地上に出てから10年が過ぎた。
そろ戻つてこないか？ もう十分だろ？」

「駄目」

通信用の鏡の向こうから、宥めすかすように熱っぽく語りかける

彼女に、僕はきつぱりとこのを突きつけた。
あーうそ。
しばらく見なー聞こまへ奇麗

「なぜだ！ お前の役目は終わつただろう！？ 今のお前なら、誰もが認めるだらう。冥府に帰れば、もはやただの植物好きな一回

の魔術師ではなく、地上に領地を切り開いた英雄だぞ？「

「だつて……」

だが、顔を真っ赤に染め、裏切り者とでも叫びそうな表情をしたアマリエルに、僕は冷や水を浴びせるがごとく冷静な一言を突きつけた。

「今の僕は地上の神様だから」

そう、今の僕は地上の民に神として扱われている。

今はまだ小さな村に過ぎないが、失われた精霊の祝福を地上に取り戻したこの肥沃な大地は、やがて大きな国と成るだろう。別に今でも人間に興味があるわけではないが、ハーキュリーの残した祈りがどのような形で実を結ぶのか、僕はそれが知りたい。そして、僕が冥府に戻らないには、もう一つの理由があった。

「なあ、アマリエル。君も地上に来て見ないか？」
「え？」

僕の口から飛び出した意外な言葉に、アマリエルの目と口が丸く開かれ、やがて真っ赤に染まつていった。

よし、脈はありそうだ。

「こつちはもうすぐ春という季節が来る。色とりどりの花が咲いて、とても綺麗な季節なんだ」

「何が言いたい。そう言つもつてまわつた言い回しが嫌いなことは知つているはずだが？」

「では、単刀直入に言つね」

きっと、その時の僕は悪戯っ子のような顔をしていただろう。

「結婚しないか？ アマリエル。昔の僕じゃ君につり合わなくていいえなかつたけど、今の僕なら堂々と言える。君が好きだよ。ここなら邪魔をする大臣たちもいない。キュウリの馬に乗つて、

君を浚いに行つていいかい？

「……植物馬鹿でモヤシのクセに生意気な」

「返事は？」

「困った事に、私も女王といつ身分でないにはいかんのだ」

アーリエルは顔を真っ赤に染めたまま、横を向いてこう言った。

が私の答えだ」「
が一番私に似合つと思う花で作ったブーケを用意しておけ。
おまえが最高の花嫁衣裳と、おまえが
は我慢してやう。……かわりに最高の花嫁衣裳と、おまえが
結婚が出来ないと聞かれてはまじで無い

荒れ果てた荒野の向こうへ、色鮮やかな森の中に、一つの豊かな国がある。

冥府からやさてきた魔術の得意な男神が治める国た
その国では、なぜかキユウリが聖なる植物と定められていて、国
のいたるところにキユウリが繁茂し続けている。

この国を訪れた旅人は、誰もが首をかしけてなぜキエウリなのが尋ねるが、そんな旅人に對してこの國の民は笑いながらこう告げるのだ。

……毎年夏になると、単身赴任の神様がキュウリで作った馬に乗つて、嫁恋しさに里帰りするのさ。

冥府で彼らがどんな恋愛をしているのか？

それは、神ならぬキュウウリのみぞ知る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3117w/>

3つの言葉「キュウリだけが知っている」@卯堂

2011年9月2日03時19分発行